

## 1

## 先端基礎研究センター創立30周年記念に寄せて

安岡弘志 (マックスプランク・固体化学物理研究所、客員)



1992年科学技術会議18号答申を受け、当時の日本原子力研究所(原研)に設置された原研基礎研究推進委員会において、「原研は原子力の研究開発という特定の目的を持った研究所であるが、原子力は総合科学技術であるという観点から、目的基礎研究や基盤技術開発と、新しい現象の発見や解明を目指す本来の「基礎研究」とを明確に区分し、本来の「基礎研究」を強力に推進する組織として先端基礎研究センターを設置する」ことが提案された。この方針に従って1993年に理事長直轄組織として先端基礎研究センター(センター)が誕生した。初代のセンター長は、伊達宗行先生(元阪大理学部長)であったが先生の強力なリーダーシップのもとに順調にセンターの基礎が固まり昨年創立30周年を迎えたわけである。歴代のセンター長、構成研究者、研究推進室、更には理事長はじめ原研の絶大な応援のもとに今日を迎えることが出来、関係各位のご支援と努力に敬意を表したい。大変残念ながら昨年2月に伊達先生は急逝されましたが、もしご存命ならばさぞかしこの30周年記念をお喜びになられたことと思います。「よく30年もったな〜」と天国で見守っていられることでしょう。

さて、原子力科学は、あらゆる科学・工学分野の基礎を形成するもので、我が国の社会基盤を支える科学技術の基礎をなすもののひとつである。そのため、将来の原子力科学の萌芽となる未踏分野の開拓を進め、新原理、新現象の発見、新物質の創生、新技術の創出を目指した先端的な基礎研究を推進するのがセンターの使命である。このことを概念的、視覚的に社会に訴えるために第1期センタービジョンが伊達先生によって策定された。それが“逆さ富士論”である。原研の研究開発を大きな富士山に例えセンターは湖の湖面に映る富士山(逆さ富士)の如くそれを土台から力強く支える存在であるという壮大な論法であった。その目的のために、先生の発案で萌芽研究、黎明研究等の当時としては先駆的な事業が開始された。私はその様な構想に憧れて第2期のセンター長に就

任したわけであるが、大先生の後を任されて当時はかなり緊張していたことを覚えている。第2期で第一に取り組んだのがセンターの国際化である。当時の松浦洋二郎理事長のご理解を頂き数名の著名な外国人をセンターにお迎えすることが出来、夫々の研究分野でグループリーダーとして活躍して頂き、国際的にセンターが見えるようになってきた。第二番目に取り組んだのは、私が東大物性研の所長をしていた頃から気にしていた中性子を用いた物性・材料研究の行く末であった。当時我が国の中性子散乱研究は原研の研究用3号炉を活用し原研の研究グループと全国共同利用の物性研中性子散乱研究施設を中心として展開されていた。然しながら両者には深い溝があり我が国の当該分野の発展のためには大きな障害となっていた。そこで、私がセンター長に就任したからには、何とかこの溝を取り除きたく思いついたのが大学側で強力な指導力を発揮されていた藤井保彦氏(物性研の中性子施設長)の首に鈴をつけることであった。幸いにも私の考えにご賛同を頂きセンターにお迎えすることが出来この壁は見事に取り除かれた。その後は日本原子力研究開発機構量子ビーム応用研究部門に発展し初代部門長として活躍して頂いた。第三に思い悩んでいたことが、“逆さ富士論”に匹敵するセンタービジョンをどのように策定して社会に発信していくかであった。これに関して、当時センターの研究推進委員会の委員長をお願いしていた近藤次郎先生(元日本学術会議会長)との話から生まれた、いわゆるセンターの“香水論”である。“香気に溢れた研究所”と題する先生の巻頭言(基礎科学ノートVol.2、No.1、1995)にもあるように原研が香気に溢れた研究所である為にはセンターは香水の役割を果たす必要があるという論法である。香水は種々の香料をブレンドして生まれるものである。個々の研究者が香料であるならばセンター長はブレンドである。昨年4月から就任された高梨弘毅センター長のもとで個々の香料の質を上げるとともにブレンドされた香水が優雅で、かつ最高の香りを醸成し続けることを期待したい。